

乾泰正先生と『佛教福祉』

上 田 千 秋

(佛教社会事業研究所前所長)

『佛教福祉』の前号の編集後記に、「本誌も第十五号を発刊することができて感慨無量である」と乾先生が書いておられる。

大学の研究所が発行する雑誌としては、どちらかというと異例なこの雑誌が、ここまで続いたのは、乾先生の長年の献身的な御努力のおかげである。

佛教大学に社会福祉学専攻の大学院が開設されるに及んで、佛教社会事業研究所が設けられたのが昭和四七年、研究所から『佛教福祉』創刊号が発行されたのが、昭和五〇年であった。研究紀要といった堅苦しいものではなく、佛教とは社会福祉の領域に関する、肩のこらない、それでいて、やや学問的なおいを持たせた、しかも親しみをもって読んで貰えるような、例えば『文芸春秋』のような雑誌を出したいというのが、初期の編集委員の考え方であったが、これには、多少とも本誌の配布を通じて佛教大学の特性を世にひろめたいという希望も込められていたように思う。

何れにせよ、研究誌でもなく、さりとて一般雑誌ともいえない『佛教福祉』が、ある程度の社会的評価を得て、今まで続いたのは、乾先生の指導力によることが、余りにも多かった。

編集企画、執筆者の選定、原稿の催促、印刷所への折衝、校正、配本等一切の事務を乾先生は常に手際よくこなされた。編集者としての先生がいかにか几張面な方であったかは、各号の「編集後記」を読めば良く解る。

先生は十年以上も佛教社会事業研究所主事として、研究所の運営に尽力された。だが乏しい研究所の予算の中で、先

生にお渡しできた「お手当」が、余りにも少なかったこと、昨年の三月に、いよいよ佛大を正式にお辞めになった際にも、大学の規則の故に相応の「お手当」を出すことができなかったことは残念に思っている。

先生は、保護鑑別所長、保護司としての長年の経験を活かして、佛教大学、龍谷大学その他の大学において「更生保護論」の講義を担当しておられた。佛教大学通信教育部の教材『更生保護論』は先生がまとめられたものであるが、晩年の先生は、わが国の『少年保護事業史』をまとめる希望を持っておられたようである。先生の豊かな学殖の片鱗をうかがうに足る論文「少年保護事業史上の佛教者について」は、本誌第十四号に掲載されている。

浄土宗社会事業の伝統の中で育たれた先生は、全国の浄土宗系社会福祉施設の訪問記を、第八号以降、ほぼ毎年にとつて丹念にまとめておられる。『佛教福祉』の編集者であった先生は、同時に『佛教福祉』にとつて貴重な執筆者でもあった。「悔悟と懺悔」（第三号）、「老人と犯罪」（第七号）、「更生保護の理念と一闡提」（第十一号）などの含蓄のある論文が発表されている。

佛教大学における社会福祉教育の生みの親であり佛教社会事業研究所初代所長であった泰隆真先生の名誉教授御就任と古稀をお祝いすべく、二代目所長恒川武敏先生を中心に作業が進められていた論文集は、秦先生の御逝去により、『追悼論文集』として御佛前に捧げられたし、恒川先生もしばらくして研究所内でお倒れになって急逝されたため、乾先生が中心となって、『恒川先生追悼論文集』をまとめたという、研究所としてはつらい経験を持っている。

長年、研究所の活動を支えて下さった乾先生の御退職を機に、『乾泰正先生記念論文集』をまとめて、積年の御労苦に感謝したいと、柴田善守現所長、田宮仁主事、奥山桂子助手の手で編集作業が進められるようになった矢先の先生御他界は痛恨の至りである。

進んだ現代医学をもってしても根治不能な難病とも闘っておられた先生は、過去五年間、毎学年の終りになると、「体のこともありこの辺で辞めさせて欲しい」と言われるのが常であった。『佛教福祉』に欠くことのできない先生に

私は「体調の良い時だけ来て頂くことにして、せめてもう一年だけ頑張って下さい」とお願いを繰り返し続けた。

乾先生と私が佛教大学を退いた昨年の『佛教福祉』に、「第十五号を発刊することができて感慨無量である」とだけ述べられた先生の最後の編集後記を読み返して、今の私は、『佛教福祉』が乾先生の生き甲斐であったと思うようにしている。『佛教福祉』の編集に没頭された時の先生の、活きいきしたお顔を忘れることはできない。